

江南村文化財調査報告 第5集

江南遺跡群 II

(宮下遺跡 元稻荷遺跡)

1985

埼玉県大里郡江南村教育委員会

序

江南村は県内でも遺跡の多いところとして知られています。その理由として平坦な台地に小さな谷がいくつも入り込み多くの湧水点に恵れ、和田川・吉野川・荒川の水利にも恵れて、人々の生活にとっても適したからです。さらに「千代の赤松」とその材質の良さを知られた松林や耕作地として残されてきた点があげられます。

ここ数年の発掘調査により祖先の貴い足跡を窺うことのできる文化財の発見が相ついでいます。千代地区の南方遺跡では縄文時代の住居跡・塩地区の丸山遺跡では古墳時代初期の住居跡・須賀広では42軒の古墳時代中頃の住居跡が見つかり、板井地区の岩比田遺跡では円型の硯・塩西遺跡ではカゴ形の土器など全国的にも貴重な遺物が掘り出されています。今回、千代地区の調査では農道部分の限られた発掘でしたが、平安時代の製鉄関連遺跡という当地域では数少ない発見でした。今後、古代の鉄生産をめぐる政治、社会等のあり方を知る上で貴重な資料となるでしょう。この小報が歴史、考古学の研究のため大いに役立ってくれることを期待してやみません。

最後に今回の調査にご協力いただいた千代区長をはじめ調査員の方々、有役なご教示をいただいた関係者の方々に深く感謝の意を表し、心からお礼申し上げます。

昭和60年3月

大里郡江南村教育委員会

教育長 小島 孫 一

例 言

1. 本書は農業振興事業の一環として実施された農村総合整備モデル事業・連絡農道推進事業に伴う昭和59年度の江南遺跡群発掘調査報告書である。
2. 本遺跡群の調査は県文化財保護課の指導を得、江南村教育委員会が主体となって実施した。予算については国庫及び県費の補助を受けた。
3. 該当遺跡の名称と所在は次のとおりである。
宮下遺跡 江南村大字千代 (埼玉県遺跡No.65-37)
元稲荷遺跡 江南村大字成沢 (埼玉県遺跡No.65-211)
4. 調査の組織は次のとおりである。
調査主体者 江南村教育委員会 教 育 長 小島孫一
事 務 局 次 長 高橋 正
社会教育主事 岡田恒雄
横山舜一
鹿庭栄子
飯島 誠
森田幹雄
5. 発掘調査は新井端が担当した。補助員には新島喜久雄(立正大学卒)の協力を得た。
6. 発掘調査の実施に当っては、以下に記す地元の方々、学生の参加を得た。
下林フミ子、小久保志ず、湯本みき、杉田ちよ、湯本トメ、大谷キラ、矢島与志、田中とよ、新井ハナ、橋本克之、井上 進、松本賢治、吉田 隆、柴田 清、持田秀樹、新井 勤、山崎 勇夫、福田寛治、割田秀彦、小川由紀子、金子とき枝、米元絵里佳、古井浩司、大和田康明、水野幸延、江森朝夫、大倉俊治、小久保 聡
7. 本書の執筆・編集は新井端・新島喜久雄が行った。また報告書作成までには、湯本千代区長、遺物の整理、トレース作業に、神谷君子、志村もと子、福島和子の協力を得た。

(敬称略)

目 次

1985 宮下、元稲荷

序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡をとりまく環境	3
第Ⅲ章	宮下遺跡の調査	
第1節	検出された遺構	4
第2節	出土遺物	8
第Ⅳ章	元稲荷遺跡の調査	19
第Ⅴ章	まとめ	21
図 版		

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	2
第2図	宮下遺跡溝1号、2号跡	4・5
第3図	調査区全測図	5
第4図	第2号土壇、第4号跡	6
第5図	羽口略図	8
第6図	宮下遺跡遺物出土分布図	8・9
第7図	宮下遺跡出土羽口	9
第8図	宮下遺跡出土須恵器	12
第9図	宮下遺跡出土かわらけ、陶磁器	14
第10図	宮下遺跡出土石器	16
第11図	宮下遺跡出土縄文土器	17
第12図	元稲荷遺跡出土遺物	19
第13図	元稲荷遺跡トレンチ配置図	20

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景
図版2	表土除去状態、完掘状態
図版3	第4号跡、鉄滓出土状態
図版4	第2号土壇、第3号土壇
図版5	鉄滓
図版6	羽口、鉄滓
図版7	須恵器、陶磁器、瓦器
図版8	縄文土器
図版9	須恵器
図版10	元稲荷遺跡調査風景

第 I 章 発掘調査の経過

江南村では、昭和56年度に計画済の「江南村農村総合整備計画書」に基づいて、各種の農業関係事業が実施され、その成果を着々と顕し始めている。開発に先立っては、もちろん事前に埋蔵文化財を記録するため、既に塩、板井、須賀広地区と発掘調査を実施してきた。江南の場合、昭和40年代に大規模な土地改良、区画整理事業を終了しているため、農村環境の整備に伴う用排水路、農道、堆肥等の集積所建設などの中小規模事業が、昭和50年以降継続して行われている。今後もこれらの事業が予定されている。このような状況のため、同一年度内において、用地の取得・工事の完成という事業リズムになることが多く、発掘調査の実施時期・期間の予定について制約されることもあった。

昭和59年度は、板井地区-2・千代地区-2・小江川地区-1・成沢地区-1の合計6箇所に上記の事業が予定されていた。すべて事前に現地の状況を調査したところ、千代・成沢の2箇所が埋蔵文化財の包蔵地に当たることを確認した。発掘調査は千代地区の農道拡幅改良事業地内と成沢地区の堆肥センター建設用地内を行うことになった。

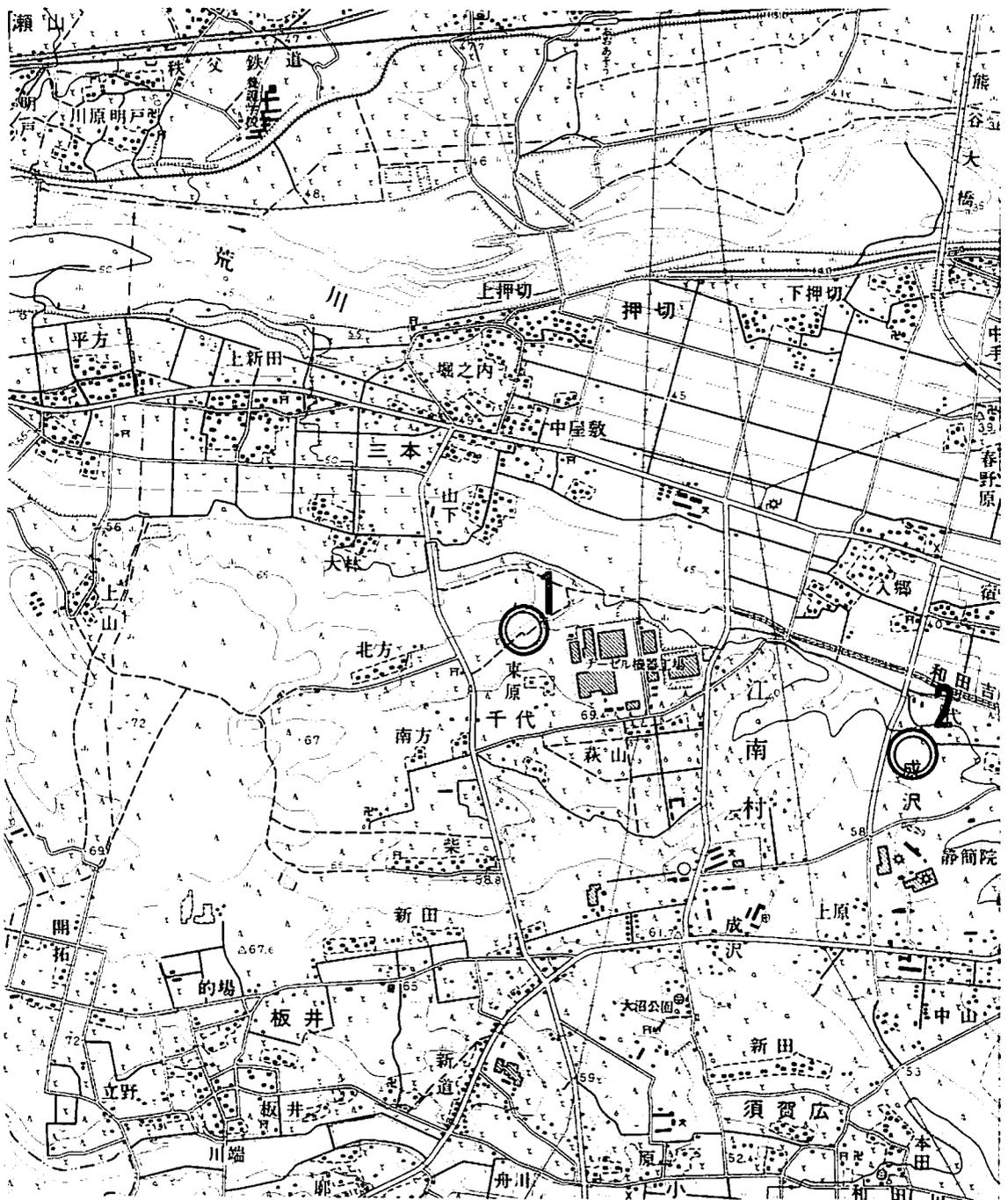
千代地区は、宮下遺跡の南側を縦走する道路を拡幅延長するもので、現状の畑地部分を試掘したところ表採遺物と同じ奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土した。トレンチの総延長は145mとなった。発掘調査は7～8月に行った。調査区は道路の東端部の500m²である。覆土は浅く、カク乱部分が所々にあったが遺構は比較的良好に残っていた。確認された遺構は、溝跡-2、土壇-4、タタキ状の床推定部分、鉄滓集中部分が検出された。遺物は縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器片と、鉄滓、窯壁の残滓が出土した。調査の終了と同時に工事が着工された。

成沢地区は、元稻荷遺跡の西隅に堆肥収蔵施設を建築する事業で、現状の山林部分を伐採後調査を行った。用地の決定に時間がかかり、調査は12月に入ってから行った。畑地部分では縄文土器の散布を認められたが、工事地内では山林のため表面観察できなかった。樹木の伐採後、幅1m、延長270mのトレンチによる遺構確認を行ったが遺構は検出されなかった。覆土中から少量の縄文土器が検出された他は遺物は出土しなかった。



発掘調査の終了後、本年度分の発掘調査報告書をまとめるため、整理作業を継続的に実施し、1月までには遺物の整理、図版作成を終えた。

(事務局)



- 1. 宮下遺跡
- 2. 元稲荷遺跡

(1:50,000)

第1図 遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

開発が進む江南村は熊谷市より10kmの格好の生活圏に入っている。そのためか、村の大部分を占める台地の開発は各種の法規との調整を抜きにしては一步も進められない。江南の台地は役場周辺の市街化区域を除いて、大部分は山林・畑地等の調整区域となっているが、年々開発件数が増加している。人口も着実に伸びを見せ、昭和60年度には町制の施行も予定されている。住みよい町づくりのため調和のとれた開発が行なわれるよう望みたい。

宮下遺跡の立地する場所は、江南台地の北縁、標高60m程で下位の沖積低地へ開口する小支谷の中ほどに位置している。前面には狭長な谷が西南方向へ長さ約1.5km侵入している。奥部で二股に分岐し、最奥部にはそれぞれ植木沼と三角沼の溜池が構築されている。谷の幅は約100mだが、北方の飯玉神社付近でややくびれ、宮下付近が約120mと最も広く、開口部の押出付近で約40mと狭くなり、下位の沖積地へ連絡している。開口部付近の比高差は7～8mで、それまで最奥部から開口部前まで2～3mと緩やかに降ってきた谷津面が急激に落下する。地名に付けられた押出はこの落差を流れ出る水流や土砂の激しいさまを表現したものだだろう。この谷津部分は、千代地区の主要な水田地帯で、奥部の溜池に貯水された用水を主に利用している。現在は麦と米の二毛作が一般的に行われている。高燥な台地部分は桑畑・松林が大半を占める。林間には椎茸の露地栽培が多く行われている。しかし、一方では山林の荒廃が目立ち、なかでもゴミの不法投棄、管理放棄のためひどい藪となり、ゴミの不法投棄に拍車をかけていることが多い。さらに最近では林の90%を占める赤松林に、松枯の被害が侵透してきており、松林の消滅が危惧されている。村全体では昭和58年に刊行した姥ヶ沢遺跡の報告時より2割程度、山林の減少が認められる。千代地区は東原に部品組立工場が所在するが全体として農業を主幹産業としている地域である。

江南の台地を被う山林中には埼玉県史跡塩古墳群をはじめ、野原古墳群、寺内廃寺といった重要な遺跡が数多く残されている。千代地域でも権現坂埴輪窯跡などが知られている。旧石器時代以来、押出・宮下・南方・天神谷・植木・東原・萩山の遺跡が確認されている。昭和57年に調査を行った南方遺跡では、縄文時代早期撚糸文系土器群と押型文系土器群が当時の住居跡と伴に検出され、さらに中期加曽利EⅠ期の住居跡も発掘された。昭和43年破壊の東原遺跡では加曽利EⅡ～Ⅲ期の集落が存在していた。植木沼の北東、植木遺跡では昭和59年の調査で縄文中期に比定できる落とし穴状遺構が発掘されている。この千代の谷津周辺では奥部から中部に縄文早期～中期前半の南方遺跡の集落があり、開口部には中期後半の東原遺跡の集落があったようだ。弥生時代は姥ヶ沢・在家の地点でわずかに遺物が採集されている。古墳時代に入ると江南村だけでなく、周辺でも遺跡数が増加する。古墳、埴輪生産跡の発見・発掘は知られているが、集落の発掘は少ない。奈良・平安時代の発掘調査は、板井、野原周辺では数例あるが、千代地区では今回の宮下遺跡の発掘が初めてであった。しかも製鉄関係の遺跡の発見は、塩一荒井遺跡・野原一熊野遺跡で「小鍛冶を行った住居跡」の発見が知られているだけに、当時の鉄生産、鉄製品の供給に関わる問題を解く重要な資料になることは間違いない。

第Ⅲ章 宮下遺跡の調査

第1節 検出された遺構

第1号溝（第2図 図版2）

主軸を南北方向に持ち、長さ23mに渡って検出された。北側はさらに区外へ延びており、南側は杭A-7付近で途切れている。幅1.2m、底部はほぼ水平となり地山の傾斜に伴って深くなる。掘方は箱薬研を呈するが、一部やや内湾する部分もある。最も深い位置で68cmを測る。遺物は下～中位で少量の鉄滓、須恵器片が、上層より陶磁器が出土している外、出土数はわずかである。1号溝は2号溝と共に旧道をはさむような状況をしていたのであり、集落に伴う排水溝的な性格の外（製鉄跡を囲む除湿のための溝）、旧地割の跡とも考えられる。2号溝は旧道の測溝に利用されていた。

第2号溝（第2図 図版2）

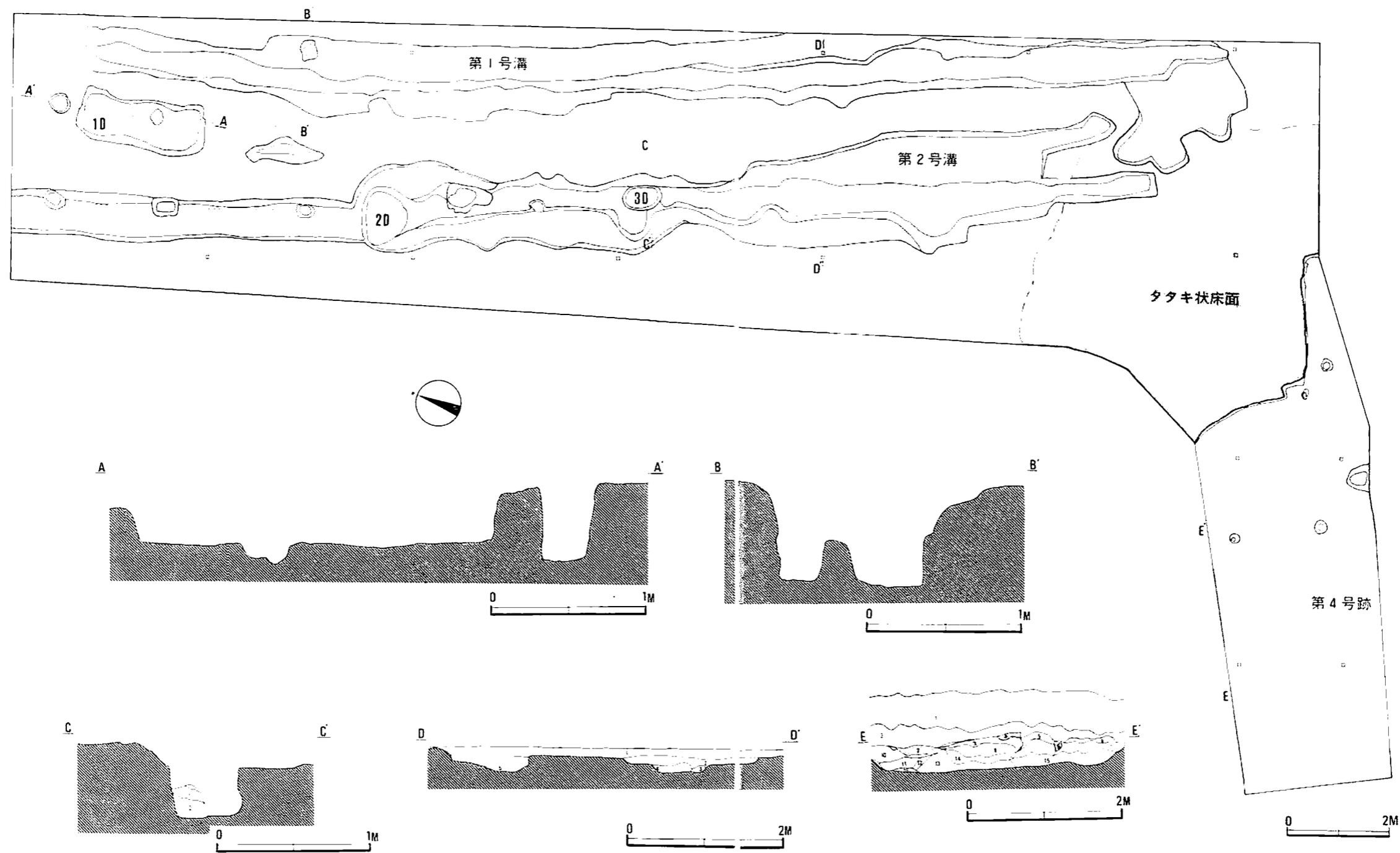
1号溝と同じ主軸を持つが形態的には若干異り浅い葉研型をしている。2～3回掘り直されているようで溝幅が広がっているが、上層では確認できなかった。重複する2号、3号土壇を切っている。南北方向に22.8m検出され、北側はさらに区外へ延び、南側は杭B-6付近で途切れている。幅0.8m、深さは浅く26cmで底部は斜面と同様の傾斜を持っている。旧道の測溝と考えられる。遺物は上面より鉄滓、陶磁器片など混在して出土するが、時期を特定できる遺物は無かった。

上層（第2図 D-D）

- 1層 ローム粒子を含む茶褐色土
- 2層 ローム粒子、ローム粗粒を多く含む茶褐色土
- 3層 ローム塊を含む暗茶褐色土
- 4層 黒茶褐色土
- 5層 茶褐色土

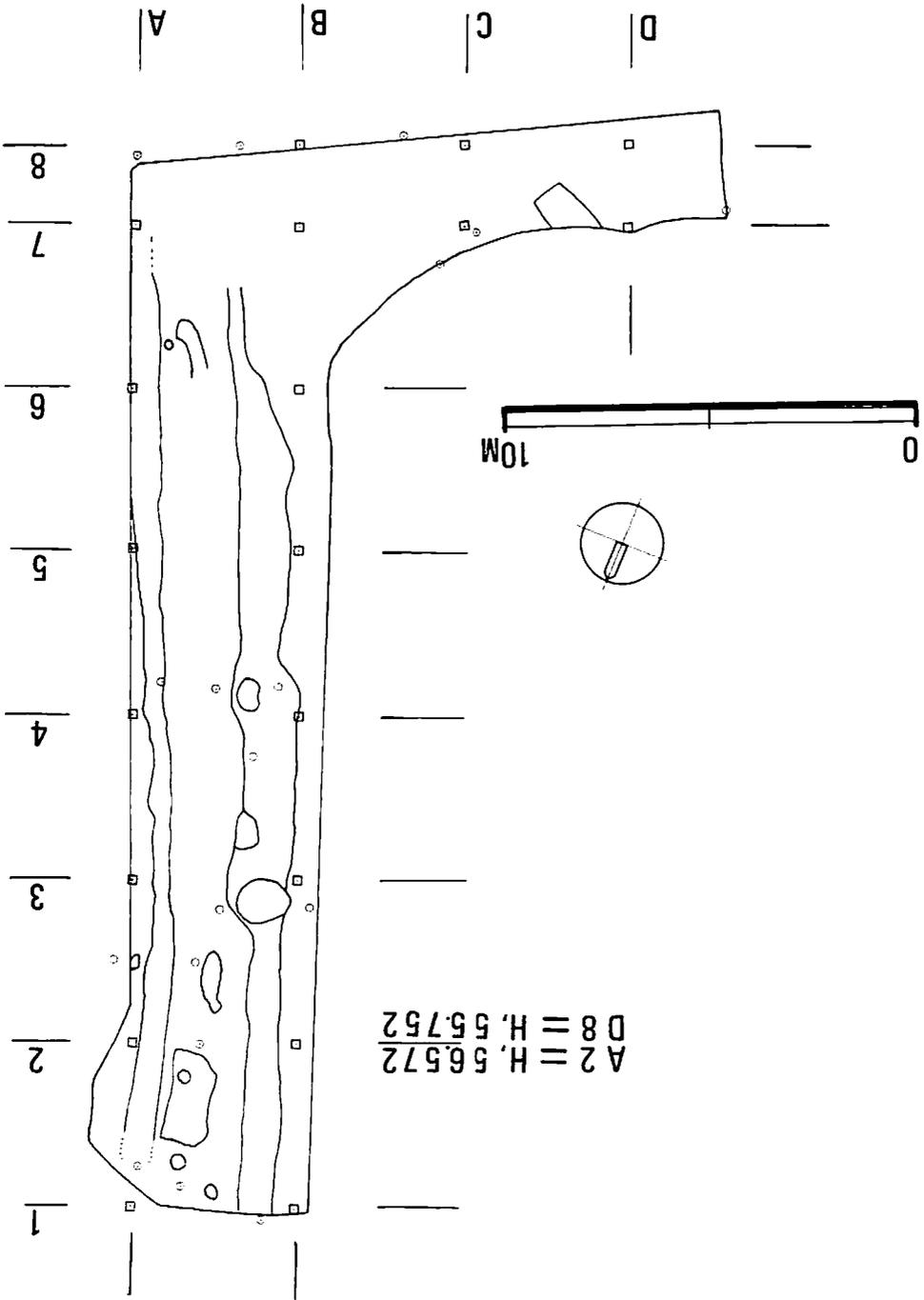
第1号土壇（第2図 図版2）

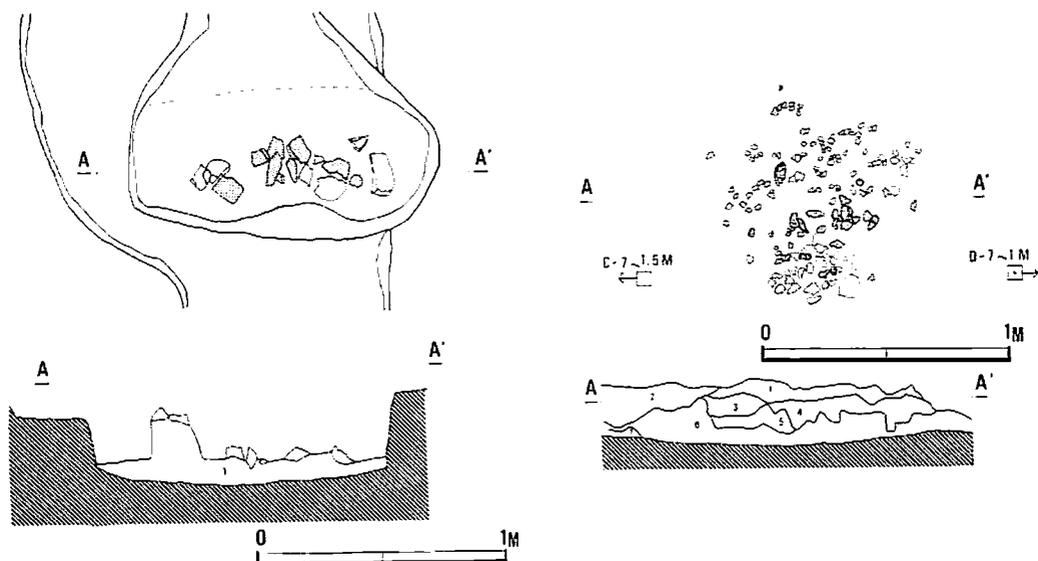
掘立建物跡のPitと重複しているが土壇の方が新しい。長さ2.5m、幅0.9m、深さ36cmとほぼ長方形の上面形をしている。壁の立ち上りは70～80°で、断面形は箱形を呈している。遺物の出土は無い、墓壇であろうか。



第2図 宮下遺跡溝1号、2号跡

第3区 調查区全測図





第4図 第2号土坑、第4号跡

第2号土坑（第4図、図版4）

第2号溝に切断される土坑である。長さ1.25m、幅0.6m、深さ32cmを測り、上面形で長楕円をしている。底部より約10cm浮いた状態で礫の出土を見た。北壁側に片寄っており、土坑の長軸に平行して長さ80cm、幅30cmの範囲に集中していた。礫は15～20cm大の破損礫で8個（トーンの付いたもの）が焼けていた。1層は焼土・炭化物を含んでいる。骨片等は検出されていない。土坑の壁はほとんど焼けていないので、炭化物、焼土は礫と共に他の場所からこの土坑に埋設されたようである。時代は不明だが、墓坑と考えられる。

第3号土坑（第2図、図版4）

第2号溝に切断される土坑である。長さ72m、幅46m、深さ48cm、上面形は楕円形を呈する。遺物は出土していない。

第4号跡（スラグ原）（第2、4図、図版3）

第4号跡の周辺では、検出面の上層から鉄滓の出土が頻繁であったが、第2層下面に最も集中していた。出土状況は遺構に属するものではなく粘土・土器・鉄滓と共に捨場に投棄されたようであった。鉄滓の堆積層は一層であった。投棄の回数は鉄滓の重量や、堆積の様子から2回を超えないと考えられる。また多くの鉄滓と混在して須恵器片、羽口片が出土している。須恵器の時期差があまりないことも投棄の回数に限られていることが推測できる。鉄滓については、I類とした窯壁部分の出土が多く、窯体の造りかえ等に伴って一括廃棄されたと考えられる。近傍に炉体が所在する可能性がきわめて高い。

A-Aの層位（第4図）

- 1層 鉄滓窯壁片層
- 2層 焼土・鉄滓の粒子を含む赤褐色土層
- 3層 焼土粒子を多量に含む灰褐色土層
- 4層 焼土粒子を少量含む灰褐色土層
- 5層 焼土粒子と褐色粘土を含む茶褐色土層
- 6層 茶褐色の砂質土
- 7層 茶褐色粘土を含む軟質の黒茶褐色土層

E-Eの層位（第2図）

- 1層 灰茶褐色土 耕作土
- 2層 黒褐色土
- 3層 鉄滓、焼土粒子を多量に含む黒茶褐色土
- 4層 鉄滓層
- 5層 焼土粒子を多く含む黒褐色土
- 6層 焼土粒子を多く含む黒褐色土
- 7層 鉄滓、黄褐色土を含む暗褐色土
- 8層 焼土粒子を多量に含む暗褐色土
- 9層 焼土粒子と鉄滓を多量に含む黄褐色土
- 10層 黄褐色の砂質土を含む黒褐色土
- 11層 灰褐色砂質土
- 12層 灰褐色砂質土
- 13層 黄褐色土をまだら状に含む灰褐色砂質土
- 14層 焼土粒子を含む灰褐色砂質土
- 15層 硬く焼けた黄褐色土
- 16層 灰褐色粘土

タタキ状床面（第2図）

杭B-7付近で、6.1×6.3cmの範囲に拡がり、さらに区外へ延びている。軟質ローム層下層の硬質な凝灰質層が地山となっている部分に黒色・茶褐色の粘質土がタタキ状に貼られている。部分的にカク乱を受け不定形をしている。作業場的な性格を持つのであろうか、柱穴等は検出されていないが周辺には2本の柱穴があり関連する遺構かもしれない。

建物跡（第2図）

1・2号溝、1号土坑を重複しており、両者に切られる。柱穴のみの検出で遺物はほとんどない。遺存状況から2×2間、または2×3間の倉庫状の建造物になると考えられる。柱穴は6ヶ所しか検出されていない。主軸はほぼ南北方向を示している。A-A'上にかかる柱穴は直径32cm、深さ45cmを測る。検出面は特に踏み固められてはいない。時代は不明である。

第2節 出土遺物

羽口（第7図、図版8）

羽口はすべて4号跡から出土した。出土状況は、鉄滓・土器片と混在していた。検出された羽口はすべて小さな破片で鉄滓が融着したり、高熱により発泡しているため、遺存状況からは羽口と区別のつかないものもあった。

このような状況であるため図示できたのは7片にすぎない。

1は先端部の小破片で発泡した鉄滓が融着している。焼成良好、灰褐色で胎土にスサと長石粒子を含んでいる。

2は中位の小破片で直径約6cm、孔径約1cmと推定される。焼成良好、茶褐色で胎土に多量のスサ・長石粒子・小石を含んでいる。

3は中位の破片で直径約6cmと推定される。内側は大きく剥離している。焼成良好、茶褐色で胎土にスサ・長石粒子を含む。2と同一個体であろう。

4は先端部の破片で発泡した鉄滓が融着している。直径約5cm・孔径約1.2cmと推定される。焼成良好、紫灰色で胎土にスサ・長石粒子を含む。

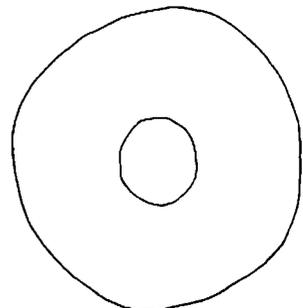
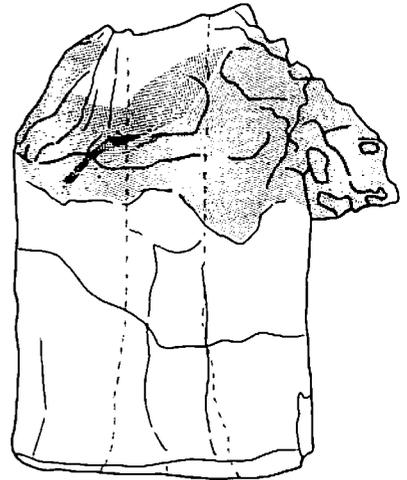
5は先端部の小破片である。焼成良好、黒灰色で、胎土は長石粒子を含むがスサは含まない。

6は先端部の小破片である。焼成良好、黒色で胎土は長石粒子を含むがスサは含まない。

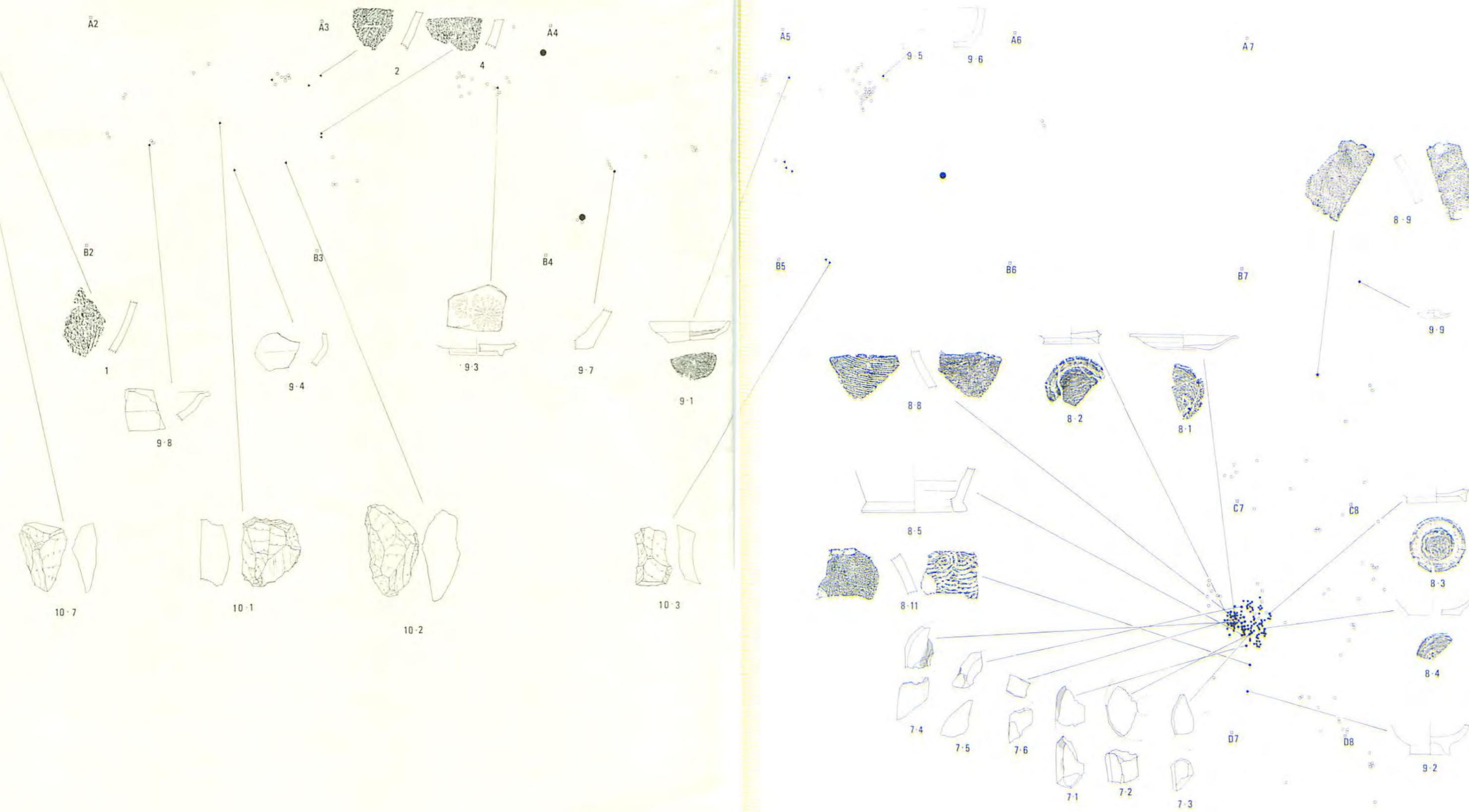
7は先端部の小破片である。焼成良好、黒灰色で胎土は長石粒子を含むがスサは含まない。

上記の羽口片と図示できなかった小破片を含め、接合できた資料は1例もなかった。形状や、胎土等の差から全体で5個体前後になると推定される。破片の折損面を見ると、明瞭な接合痕は認められず、不定形の例がほとんどであった。まるで使用後、細く破砕して投棄したようである。通風孔の内面には篠竹を抜き取ったような細い条線が認められる。外面の調整はほとんど不明である。成形方法としては、篠竹のような棒状工具に粘土塊を巻きつけて形を整えたのであろう。

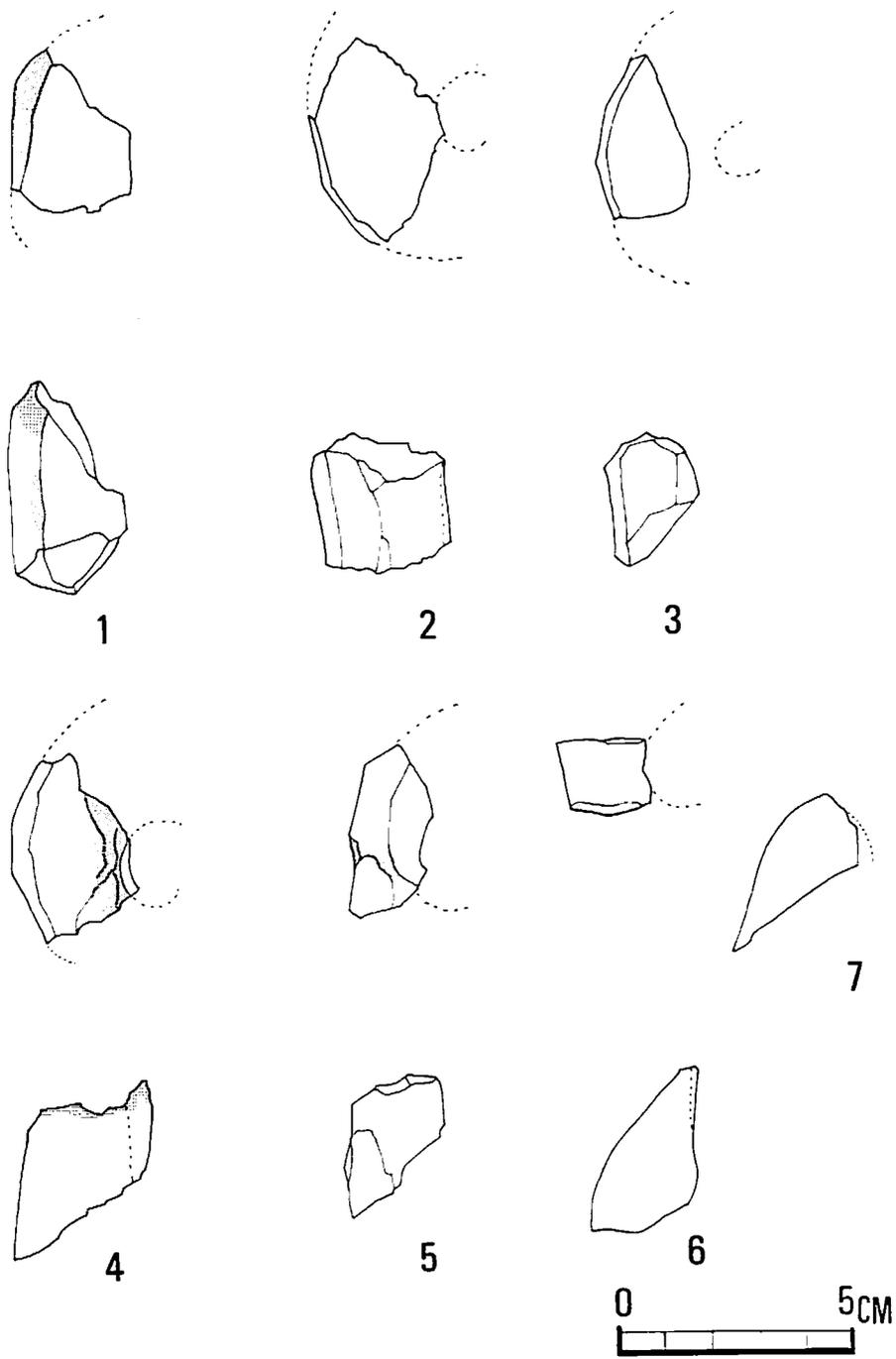
宮下遺跡から出土した羽口はとても全体を復元できるほどではないが、個々の破片を勘案し、あえて全体の形を考えてみた。先端部分はやや丸味を持ち、直径は5cm前後、中位は直径6～9cm、基部はやや太くなる。全長は11～14cm、孔径は1.2～1.6cmで基部に近づくにつれ広くなると推定される。



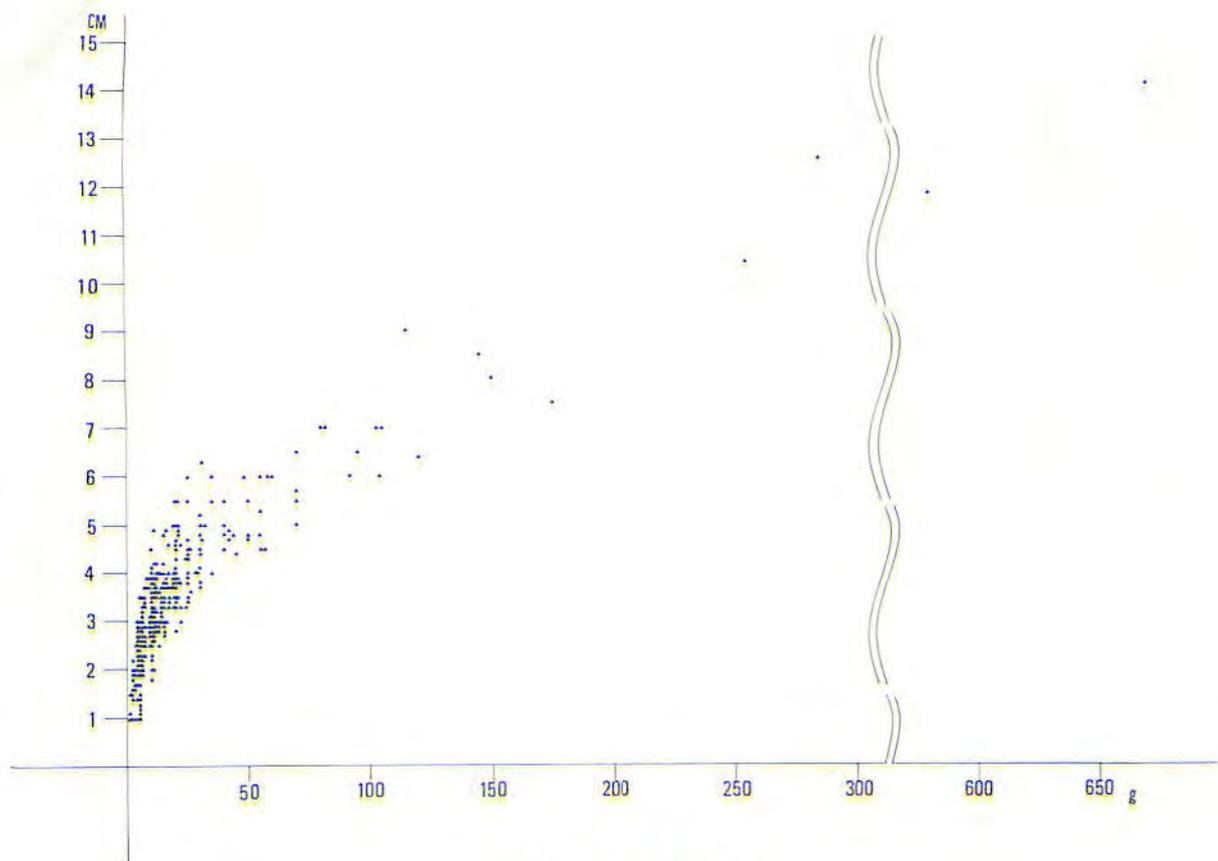
第5図 羽口略図



第6図 宮下遺跡遺物出土分布図 (遺物の) は補図番号と同.)



第7图 宮下遺跡出土羽口



第I表 鉄滓重量分布図

鉄滓（図版5、6）

宮下遺跡より出土した鉄滓はほとんどが4号跡より検出された。総重量約5.5kgで、これは融着した窯壁部分も含んでいる。鉄滓については成分分析を行っていないので、遺存の形状などから大まかな分類を試みた。今後、成分分析等をふまえ資料として充実させたい。

I類	（窯壁）	A	スサ混入	3.2kg
		B	土器混入	0.4kg
II類	（製練滓）	A	塊形	0.5kg
		B	不定形	1.1kg
III類	（ガラス質状に発泡しているもの）			0.3kg

上記III類に大きく分けたが、以下それぞれについて説明していきたい。

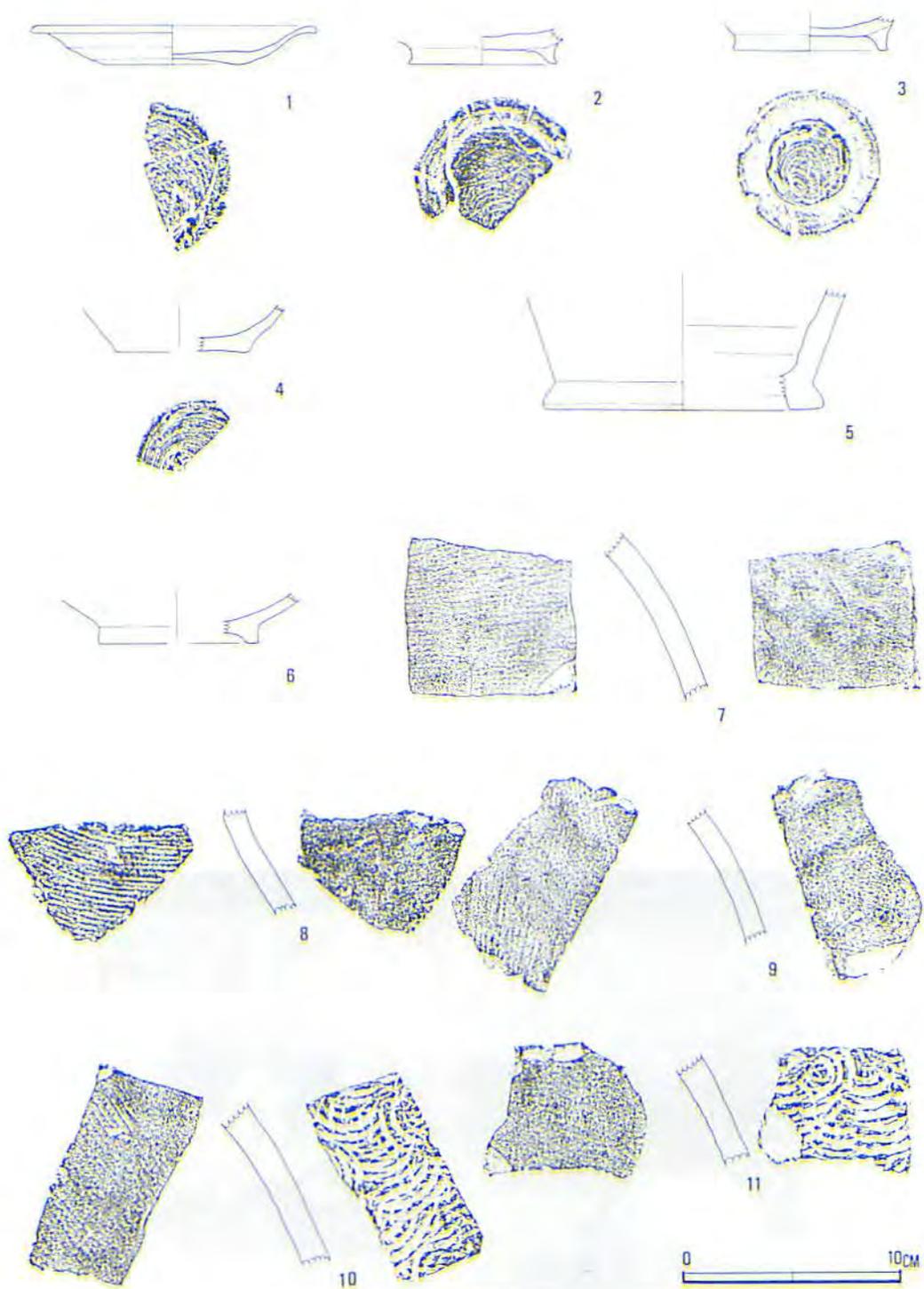
I 類は図版 5 - 3 で大量のスサを混入している。胎土は小石を含む茶褐色土を主体とする。窯壁の内層であろうか直接鉄滓の付着は認められない。重量は 630 g であった。図版 6 - 3 は須恵器の破片が封入される例で窯壁の構築材に転用されたものだろう。他に図版 6 - 13、14 の発泡した須恵器片もある。

II 類 A は図版 5 - 2 で長さ 11cm、幅 8.7cm、厚さ 3.8cm を測る上面はほぼ平坦、下面は丸く塊形をしている。重量は 0.5 kg であった。塊形の形状する鉄滓は 1 例だけで他に検出されていない。本例は 4 号跡より検出された。

II 類 B は図版 5 - 1 に代表例を挙げた。凹凸、多孔に富む、本例は長さ 8.2cm、幅 5.6cm、厚さ 2.3cm、重量 150 g を測る。4 号跡より検出された。図表で見るとおり、本類と窯壁小片が主体を占めている。

III 類は長さ 2 - 3 cm と小さく、また発泡してガラス質状になっているため重量は軽く、10 - 15 g 前後しかない。平板状の例（図版 6 - 4 - 7）と滴化状の例（図版 6 - 8 - 12）がある。





第 8 図 宮下遺跡出土須恵器

須恵器（第8図、図版9）

出土状況は第4号跡より集中して出土した他は覆土中からの散見に過ぎなかった。器種は坏、埴、甕、壺などで完存する個体は無く図示できた6点もすべて復元実測である。個体数はおよそ坏、埴-7~8、甕-5~6、壺-7~8、蓋-2と推定される。

1は4号跡より鉄滓、羽口片と混在して出土した皿である。50%遺存しており5片に破損していた。口径約13.2cm、底径6.8cm、器高1.7cmを測る。底部は回転糸切離のままである。焼成は良好で白灰色をしており胎土に石英、片岩等の砂粒を多量に含んでいる。未野産であろう。本文では胎土に長石、石英、片岩、軟質酸化物などを混和材を多量に含む製品は、荒川の上流、寄居町末野窯跡群の製品と推定した。南比企窯跡群の製品は一般的に精選されており、白色針状物を混入することが多いので産地を区別する示標に利用した。

2は4号跡より出土している。底部だけの埴である。底径は6.8cmを測る。回転糸切離後、外へ開く高台を付けている。焼成は良好、暗茶褐色をしており胎土に片岩・軟質酸化物を多量に含んでいる。未野産である。

3は4号跡より出土している。**底部のみ完存する埴である。**底径は7.1cmを測る。回転糸切離後、直立気味の高台を付けている。焼成は良好、白灰色をしており胎土に長石、片岩、軟質酸化物を多量に含む。未野産である。

4は4号跡より出土している。底部40%の破片である。底径は約6.2cmを測る、回転糸切離のままである。焼成は良好、青灰色をしており胎土に石英粒子を含む。未野産と思われる。

5は4号跡の上層、覆土中より出土した壺である。同一個体と思われるが接合しない底部破片2片を合わせて40%遺存している。底径13.2cmを測る。内外面とも丁寧にヨコナデされる精良なつくりである。焼成は良好、黒青色をしており胎土は精選される。

6は4号跡より出土している。底部40%の小破片である。底径は約7.4cmを測る。直立する高台を回転により削出している。焼成は良好、黒灰色をしており胎土は精選されている。南比企産か？

7~11は甕の破片である。口縁、底部付近はあまり検出されていない。胴部の小破片が主体を占め、4号跡・覆土中から出土している。

7は外面を平行タタキ、内面をタタキ後ナデ消されている。焼成良好、黄灰色をしている。長石粒子を多く含む。

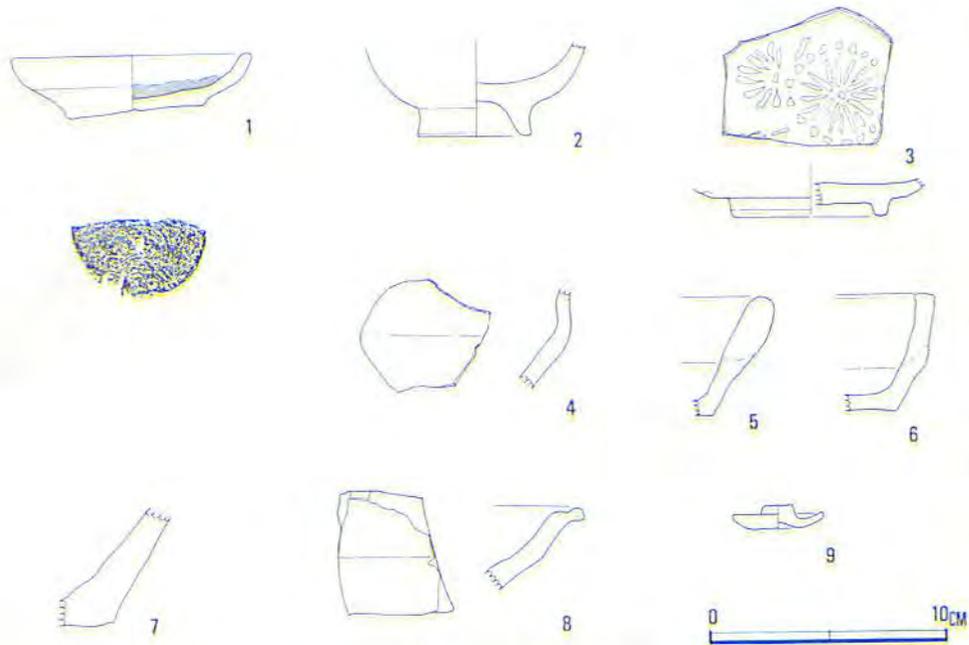
8は肩部の破片で、外面を平行タタキ、内面は良くナデられタタキ痕を残さない。焼成良好、黒青色をしている。未野産と思われる。

9は外面を平行タタキ、内面をヨコナデされる。焼成良好、茶褐色をしており、胎土は精選される。

10は外面を平行タタキ、内面を円弧タタキする。焼成良好、黒褐色をしており、胎土は精選されている。

11は外面を良くナデられ、内面を円弧タタキしている。焼成は良好で黒青色をしている。

宮下遺跡から出土した須恵器の中には窯壁中に封入された例（図版9-3）や、鉄滓が融着した



第9図 宮下遺跡出土かわらけ、陶磁器

り、発泡した例（図版9-13、14）がある。これらの須恵器は製鉄に関係して、砂鉄や水の貯蔵、計量に使用されたものであろう。そして破損した須恵器は窯壁の構築材に転用されたり、鉄滓や羽口片と共に投棄されたのであろう。

かわらけ、陶磁器（第9図、図版7）

本遺跡からは、中～近世にかかるかわらけ、陶磁器類は総数で32片検出されている。これらの中で19片は内耳土器の破片で2個体分がある。他はみな6分の1以下の細片であり図示できるものだけを掲げた。

1は燈明皿に使用されたと考えられるかわらけで60%遺存していた。口径10.0cm、底径5.7cmを測る。口縁中位よりやや肥厚しながら立する。端部は丸味を持つ。内面底部にはタール状の炭化物が膠着している。底面は回転糸切痕をそのまま残す。焼成良好、黒茶褐色をしており胎土は精選されている。

2は近代の茶碗であろう。乳黄褐色をしており胎土は精選される。高台径4.8cmを測る。

3は菊花文の絵付皿、文様は茶褐色で描かれる。色調は灰褐色をしており胎土は精選される。高台径8.3cmを測る。

4は天目茶碗の口縁部小破片である。暗茶褐色をしており胎土は精選される。

5は内耳土器の口縁部破片である。厚く肥厚し口縁端部は丸味を持つ。焼成良好黒灰色、断面中心は黒色とサンドイッチ状になっている。外面にスス・炭化物が付着している。

6は内耳土器の口縁部破片であるが、5とは形態、焼成、胎土とも異っている。薄手の造りで口

縁部は内側につまみ出され、上面は平坦となる。焼成良好、灰白色、断面中心は黒色のサンドイッチ状になっている。胎土に細砂を多く含む。5、6は近接して発見され、接合しないか両者に属すると思われる破片が出土している。

7は常滑の甕又は壺の底部破片、焼成良好赤褐色をしている。

8は近世の皿、口縁部破片である。焼成良好朽葉色をしている。蓋の可能性もある。

9は蓋であろう。直径3.8cmを測る。焼成良好灰色、須恵質で下面に灰釉がかかる。つまみ上面には糸切痕が残っている。

縄文土器（第11図、図版8）

宮下遺跡からは6片の縄文土器が出土している。すべて覆土中からの検出であった。ほとんどは早期撚糸文系土器群で、他は条痕文系土器群であった。7は弥生期のものと思われる。

1は器厚9mmとやや厚い胴部破片である。器面には撚糸文が深くはっきりと施文される。原体はRの撚糸を使用している。太さは2mm程であろう。焼成は良好、黄褐色をしており、胎土に砂粒、長石粒子を多く含んでいる。

2は器厚6mm、底部に近い破片で、上方は接合部より折損している。器面はやや風化しているが撚糸文が施文されている。原体はRと思われる。焼成は良好、明褐色をしており、胎土に長石粒子を多く含んでいる。

3は器厚5mm、底部に近い破片である。器面は風化しているが、撚糸文が施文されている。原体はRと思われる。焼成は良好、明褐色をしており、胎土に長石粒子を多く含んでいる。

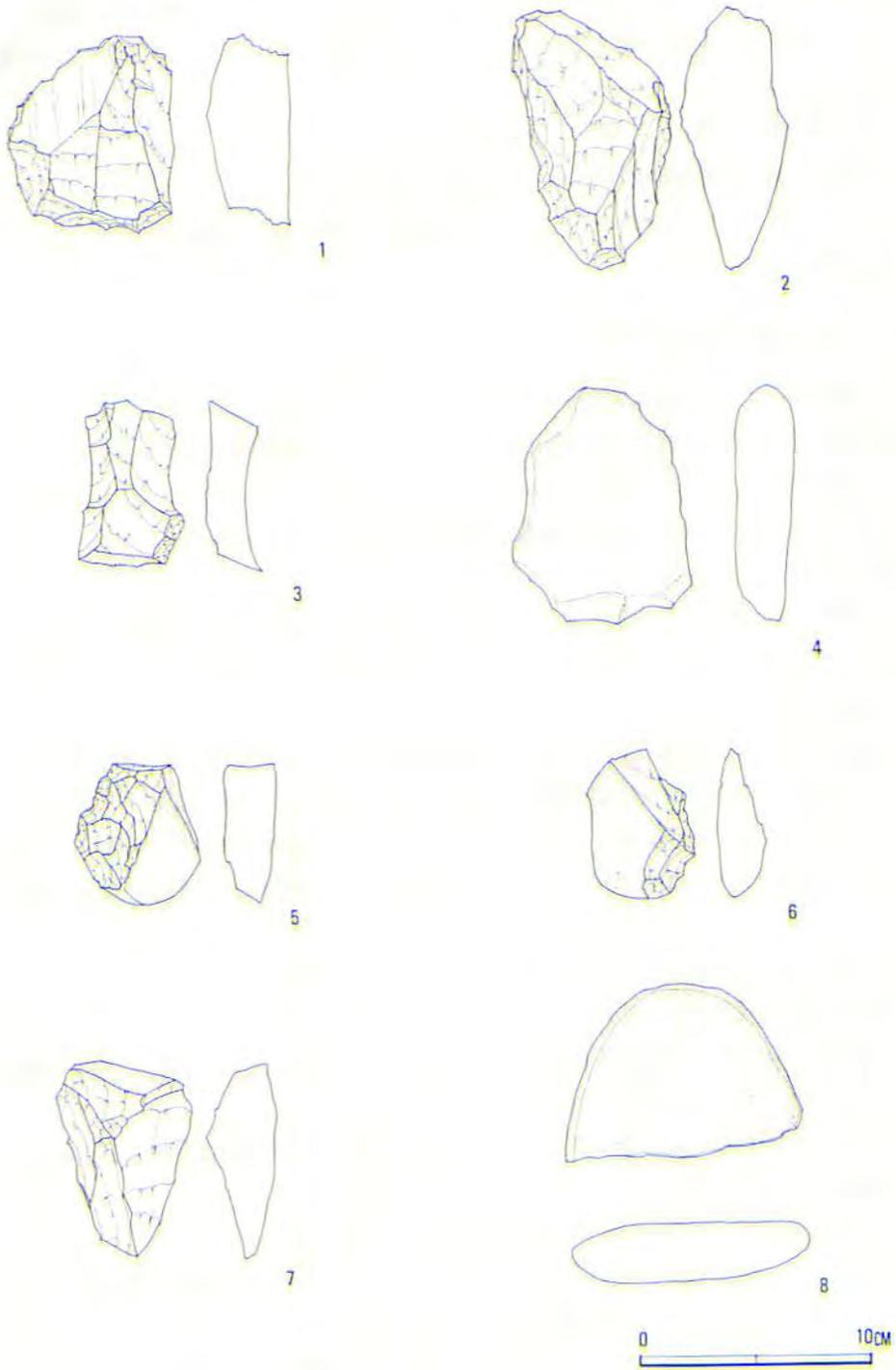
4は器厚7mm、上方を接合面より折損する破片である。器面はやや風化しているが、撚糸文が施文される。原体はRの撚糸を使用している。焼成は良好、黄褐色をしており、胎土に細砂を含んでいる。

5は器厚4mm、長さ3cmの小破片である。器面には唯一、縄文が施文される。原体はLと思われる。焼成は良好、黄褐色をしており、胎土に細砂を含んでいる。

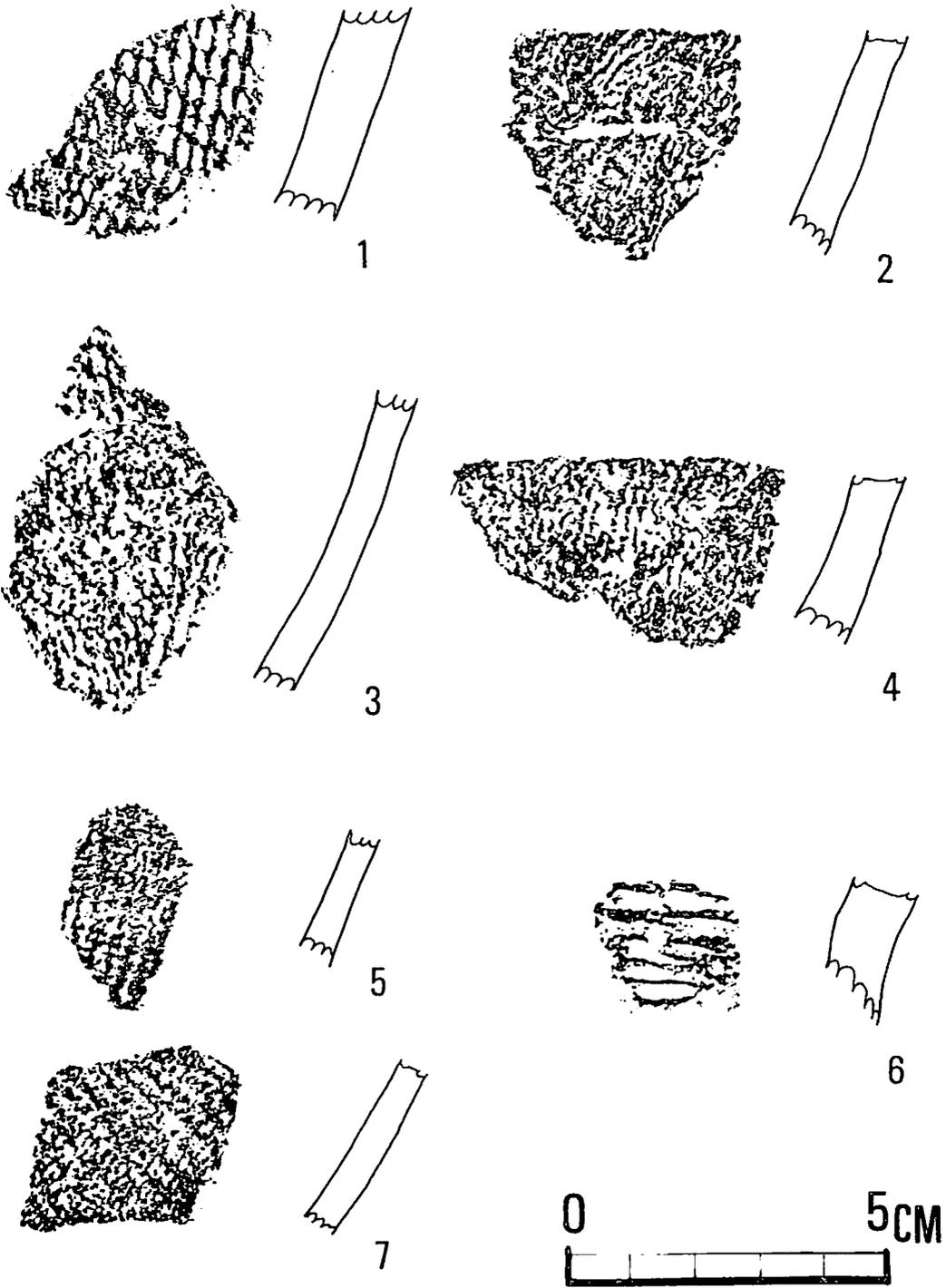
6は幅2～3mmの粗い条痕が施される。焼成は良好、黒茶褐色をしており、少量の繊維を含んでいる。上方は接合面より折損している。

7は縄文系と思われる弥生式土器で、R Lの斜縄文が施される。焼成は良好、黒褐色をしており、胎土は細砂を多く含んでいる。

撚糸文系土器群は、既に報告を行った塩前遺跡での分類に従うと、2・4・5は第I群b類（夏島式）に、1・3は第I群c類（稲荷台式）に比定されよう。6は第III群b類に属すると思われる。この中で1は、塩前遺跡の第I群c類と胎土・焼成・施文とも良く似ており、他の土器も、塩前遺跡のものに近い様相をしている。本遺跡出土の撚糸文系土器群は塩前遺跡出土土器群と比較して、ほぼ同時期か後続する時期であろう。



第10図 宮下遺跡出土石器



第11圖 宮下遺跡出土繩文土器

石器 (第10図)

宮下遺跡からは調査区の覆土や溝の覆土・表採などで、合計21点の石器が得られた。直接、縄文時代の遺構に結びつく発見は無かった。

1は背面を自然面のまま残す礫器で表採遺物である。長さ8.2cm・幅7.1cm・厚さ3.6cm・重さ230gで、石材はチャートを用いている。

2は背面を自然面のまま残す礫器で調査区覆土中から出土している。長さ11.1cm・幅6.1cm・厚さ1.6cm・重さ252gで、石材はホルンフェルスを用いている。

3は中型の剥片で、1号溝から出土している。長さ7.1cm・幅3.4cm・厚さ1.6cm・重さ74gで、石材はホルンフェルスを用いている。

4は風化の著しい礫器で調査区覆土中から出土している。長さ10.1cm・幅7.7cm・厚さ2.3cm・重さ213gで、石材はホルンフェルスを用いている。

5は自然面を残す打斧の折損品で調査区覆土から出土している。長さ6.0cm・幅5.3cm・厚さ2.1cm・重さ75gで、石材は安山岩を用いている。

6は自然面を多く残す^棒器であろうか。2号溝から出土している。長さ6.3cm・幅4.3cm・厚さ2.1cm・重さ45gで、石材は硬砂岩を用いている。

7は大型の剥片で、先端部を使用しているようである。調査区覆土から出土している。長さ8.4cm・幅5.6cm・厚さ3.0cm・重さ104gで、石材はホルンフェルスを用いている。

8は半分を欠失した磨石で調査区覆土から出土している。長さ7.4cm・幅10.4cm・厚さ2.6cm・重さ260gである。

わずかな石器であるが、礫器・大型の剥片と縄文時代早期の撚糸文系土器群に伴う石器と理解して良いだろう。

第Ⅳ章 元稲荷遺跡の調査

元稲荷遺跡の出土遺物（第13図）

いずれも縄文土器の小破片である。みな第1トレンチ（1T）北側の覆土中から出土した。

1は口縁部の小破片、復元すると口径約37.2cmの深鉢になる。口縁部はナデられ無文のまま、直線的に外傾し端部はやや肥厚する。頸部に隆帯が巡り、さらに隆帯を垂下させて区画し、その中に縄文を施文している。焼成良好、茶褐色をしており胎土に片岩・長石・小石を多く含んでいる。

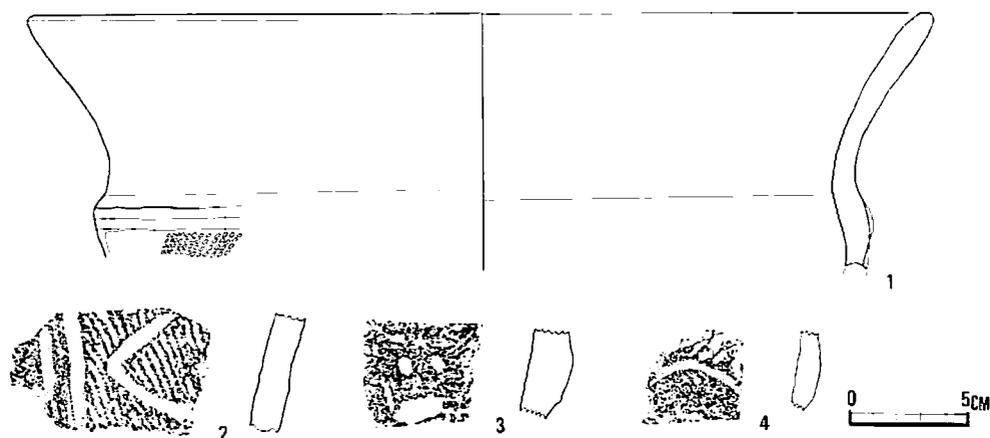
2はLR縄文を施文後、2本1組の沈線を垂下させ、沈線の間を磨り消している。さらに屈曲する沈線で文様を構成している。焼成良好、黄褐色をしており胎土に砂を多く含んでいる。

3は無文部分の小破片である。焼成良好・黄褐色をしており胎土に砂を多く含んでいる。

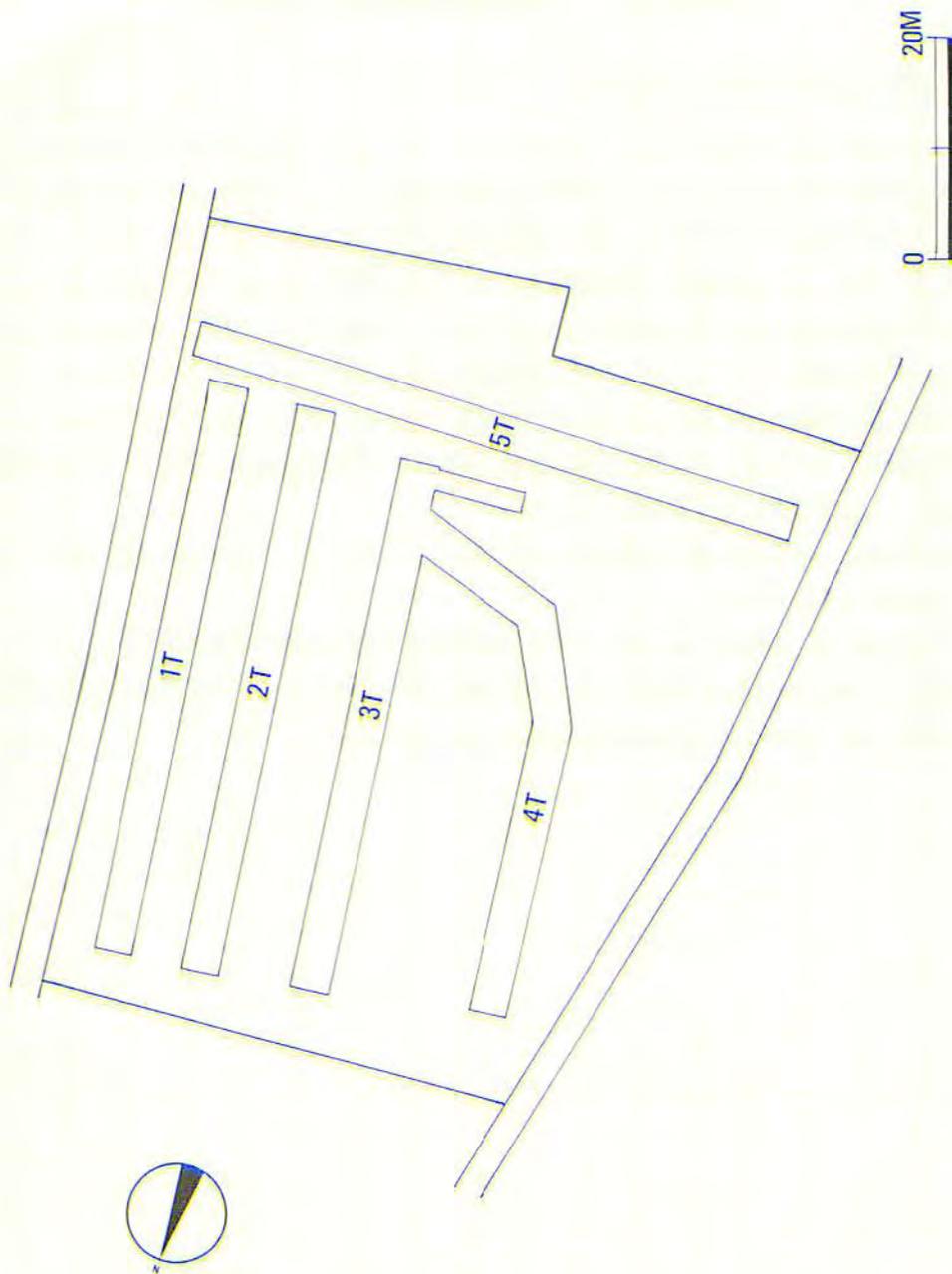
4は器面をナデて平滑にした後、沈線で文様を構成し、その中に縄文を施文している。焼成良好、黄褐色をしており胎土に砂を多く含んでいる。

元稲荷遺跡からは上記の縄文土器がわずかに検出されただけで、これは中期加曾利EⅡ～Ⅲ式土器に比定されるものである。

遺跡の周辺では、元稲荷の他、代・下前原で縄文時代中期の遺物が多数採集されている。今回の調査地点は、遺跡の中心部と考えられる下前原地区よりやや離れているので遺構、遺物の所在がきわめてまばらなのであろう。この遺跡の西限になるかもしれない。



第12図 元稲荷遺跡出土遺物



第13図 元稲荷遺跡トレンチ配置図

第13図 元稲荷遺跡トレンチ配置図

第V章 ま と め

今回の宮下遺跡の調査は発掘部分は少いが多くの新しい成果を得ることができた。縄文時代早期より中・近世までの得られた資料は江南村の歴史を知る大切な資料となるが、特筆に値することは荒川右岸の江南台地周辺で数少い製鉄遺跡が発見されたことである。荒川左岸では花園町台耕地遺跡で平安時代の製鉄遺跡が報告されている。本遺跡から直線距離にして8kmと近い。台耕地では荒川の砂鉄を原料としたようであり、宮下遺跡も砂鉄の可能性が高い。

遺跡の特徴として、台地の涯線に立地していない点は台耕地と同様で、また当遺跡より1.2km西に所在する権現坂埴輪窯跡がやはり直接涯線に立地せず、100mほど侵入した谷津の奥部に立地している点などに立地条件の共通性を考えられようか。

操業年代は出土須恵器から、平安時代の中頃から末頃に当たると考えられる。宮下遺跡では以前より奈良・平安時代の遺物が採集されているので工人達の集落が所在するようである。この時代の製鉄遺跡は荒川流域に数箇所発見され、花園町台耕地遺跡をはじめ伊奈町大山遺跡・川口市猿貝北遺跡^{註3}で製錬がの発掘が知られている。さらに集落に伴う鍛冶遺構は県内10数ヶ所に発見例がある。江南村でも2例あり、野原地内の熊野遺跡・塩地内の荒井遺跡で発見されている。熊野遺跡第4号住居^{註5}では火床が確認され、鉄滓、鋳型、るつぼ、羽口等が出土している。隣接する荒神脇遺跡には40数軒の住居跡が全掘され台地上に集落が広がっている。野原地域の台地上は奈良平安時代の大集落跡である。台地南側を流れる和田川を4.5km程溯ると板井地域の奈良・平安時代の大集落板井氷川遺跡に到達する。遺跡の東南部分、岩比田地点^{註7}では奈良・平安期の30数軒の住居跡が発掘されている。岩比田地点より和田川を挟み200m離れた台地上に荒井遺跡が位置している。第1号住居跡に火床が確認され、鉄滓、羽口が出土している。熊野・荒井遺跡の鍛冶住居は集落の需要に応ずる鉄器製作工房と考えられる。また、北風を避けるかのように集落の中心から離れ、南側に位置する共通性も窺える。さらに柴地区寺内廃寺^{註8}では寺院の造営に伴って多量の鉄資材が必要とされたと考えられる。宮下遺跡から上記3遺跡への距離は熊野遺跡4.1km、荒井遺跡2.3km、寺内遺跡1.4kmと近距離に位置するので宮下遺跡の供給圏に含まれることが予想できる。この問題は、今後とも各遺跡の時期・期間を詳細に検討していかなければならないだろう。

当時の鉄生産の主体者は製鉄に必要な砂鉄の採集、大量の木炭の集中、専門技術者の管理という経済的、政治的にも指導力を持ちえた者であろうという推定から、一般の農民層ではなく、郡司や富農等の有力者層ではないかと考えられている。この有力者層は寺内廃寺を造営するなど地域の産業に強く関わっていたのだろう。^{註11}

古代の江南村は男衾郡・大里郡・比企郡の接触する位置にあった。各郡の境界の区分や郷の配置などは先学諸氏によって論攻され評価を受けているが、論拠となる資料があまりに少いためまだ推測の域を出ていない感がある。その中で江南村西部付近は男衾郡榎津郷の故地とする意見もあるので、周辺の集落跡・廃寺跡・生産跡の調査に当っては慎重に臨みたいと思います。

- 註1 荒川左岸の段丘上に位置する。平安時代の住居跡59軒と製錬炉3基、8号住居跡から精錬炉1基、工房跡1ヶ所が検出され、製錬炉を中心に製鉄工人が集落を形成していたと考えられている。
- 註2 成分の分析を踏まえていないので、今後集落出土の鉄滓と合わせて分析検討したい。
- 註3 奈良・平安時代の住居跡46軒と製錬炉13基、鍛冶住居が検出され砂鉄から製錬加工という一連の生産を行っていたと考えられている。
- 註4 調査面積が少ないためか住居跡は検出されていない。製鉄炉5基、砂鉄の詰った土壇、木炭の詰った土壇が検出されている。砂鉄から製錬、加工という生産工程が考えられている。10世紀代という操業年代が考えられている。
- 註5 いわゆる小鍛冶遺構で江南村をはじめ県内の平安時代中～後期の集落から10数例検出されている。火床、羽口、鉄滓、鋳型を出土することが多い。
- 註6 1984年8月、江南村教委調査、縄文時代の土壇1基、平安時代の鍛冶住居1軒が検出された。
- 註7 1977年3月、岩比田遺跡調査会調査、奈良・平安時代の住居31軒が検出され、円面硯等の遺物が出土している。
- 註8 江南村の奈良・平安時代集落は、野原地区と板井地区に特に集中している。古代の郷に当ると推定されている。
- 註9 荒川は江南村付近で大里沖積地に入るため川幅も広くなり砂洲が発達している。宮下遺跡からは直線1.2kmと近いので砂鉄の採取は容易であったと考えられる。
- 註10 木炭窯は立正大校地内で検出された外例がない、近代までは台地、丘陵縁に立地していた。
- 註11 文献No.9、10、11等
- 註12 平安時代中葉に男衾郡の郡司であった壬生吉志福正は、武蔵国分寺七重塔を再建し、子息2人分の生涯の税を前納した大富豪として著名である。彼の財力の基盤がどこにあったか究明されていないが、耕地の開墾をはじめ各種産業の発展に尽力したことが推定される。特に土地の開墾には鉄製農具の利用が大きな役割をはたしたとされており、鉄生産跡の発見の意義は大きい。直に壬生氏と結びつけられないが、周辺位置する古代寺院の存在からも有力農民層、又は郡司級の豪族がかかわっていたと考えて良いだろう。

参考文献

- 浅野晴樹 石岡憲雄 梅沢太久夫 1980 「埼玉における古代窯業の発達(2)」『研究紀要2』 埼玉県立歴史資料館
- 穴沢義功 大沢正己 1984 「古代製鉄遺跡の検討」『古代を考える 36』 古代を考える会
- 金井塚良一 1976 『北武蔵の古墳群と渡来系氏族吉志氏の動向』『北武蔵考古学資料図鑑』
- 栗原文蔵 1981 「古代集落と神々」『埼玉考古 19』
- 埼玉県 1984 『埼玉県史 資料編3 古代1・奈良・平安』
- 酒井清治 1984 『台耕地Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 高橋一夫 1976 「製鉄遺跡と鉄製農具」『考古学研究 87』
- 高橋一夫 1979 「大山」『埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集』
- 中島利治 野部秋徳 1974 「下新田遺跡、荒神脇遺跡、熊野遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第22集
- 原島礼二 1978 『東松山市と周辺の古代』 **東松山市史編纂調査報告第13集**
- 原島礼二 1965 「7世紀における農民経営の変質」『歴史評論 177、179、181号』
- 福田豊彦 1981 『平将門の乱』 岩波新書 168
- 藤井一二 1975 「初期荘園と地方豪族」『日本史を学ぶ 1』 有斐閣選書
- 山口直樹ほか 1982 「自然科学的手法による遺跡、遺物の研究2 千葉県における製鉄遺跡の研究」『研究紀要 7』 千葉県文化財センター

版 圖



遺跡遠景(字北方方面)



遺跡遠景(字宮下方面)



表土除去状態



完掘状態



第 4 号迹 铁滓出土状态



本文中第 4 图 土层断面



第 2 号土坑 磷出土状态



第 3 号土坑



1

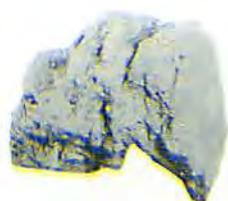


2



3

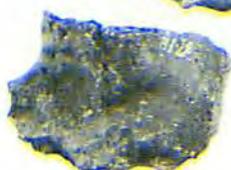
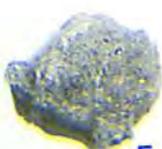
1. 鉄 塊
2. 塊 形 滓
3. スサの入った窯壁



1

2

3



4

5

6

7



8

9



10

11



12



13



14

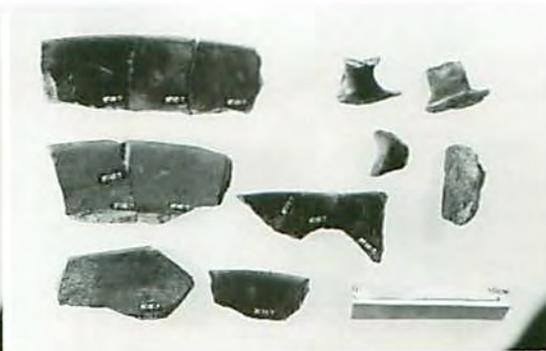
羽口(1、2) 鉄滓(3~13)



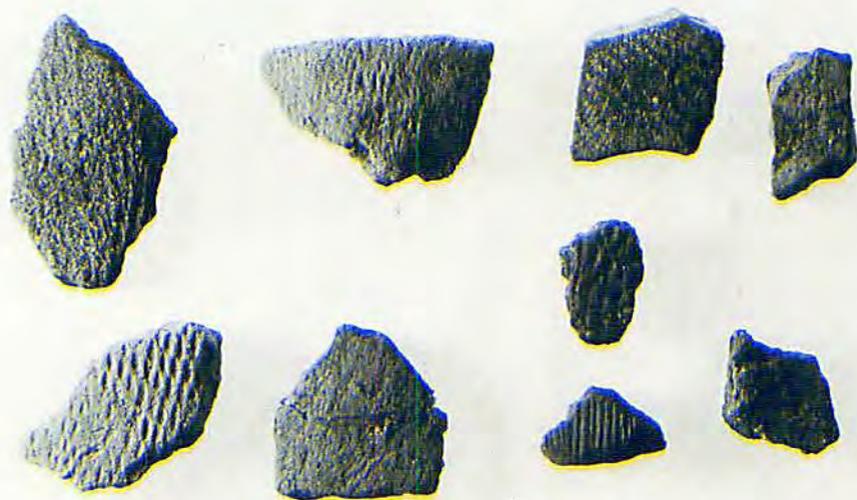
1. 須恵器破片 (表、裏)



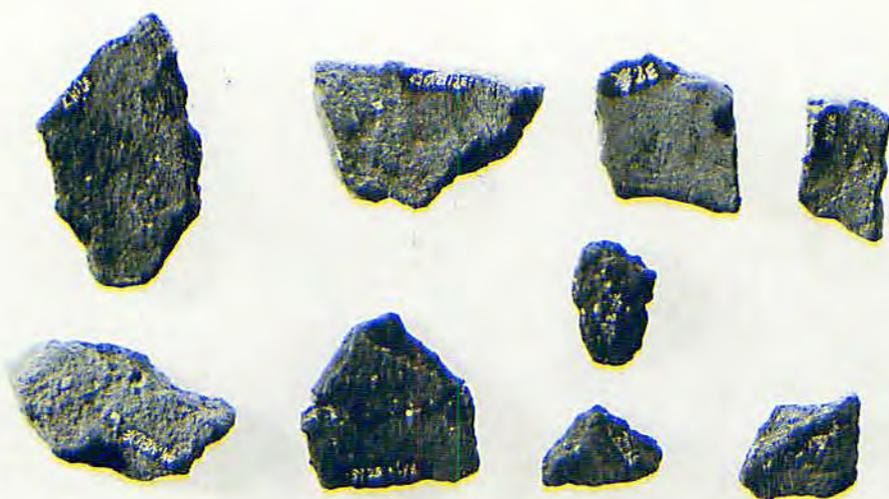
2. 陶磁器破片 (表、裏)



3. 瓦器破片 (表、裏)



縄文土器、他(表)



縄文土器、他(裏)



須恵器破片





元稲荷遺跡調査風景

江南村文化財調査報告 第5集

江南遺跡群Ⅱ

(宮下遺跡 元稻荷遺跡)

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月31日 発行

編集
発行 埼玉県大里郡江南村教育委員会

〒360-01 埼玉県大里郡江南村大字柴9-1

T E L (0 4 8 5) 3 6 - 1 5 2 1

印刷所 株式会社 きょうせい

本 社 東京都新宿区西五軒町52

営業所 T E L (0 3) 2 6 8 - 2 1 4 1 (代)
